〈特集 1〉慶應義塾図書館開館 100 年

慶應義塾図書館開館 100 年記念事業 Tempus Fugit〈時は過ぎゆく〉

石黒（いしぐろ）　敦子（あつこ）
（広報室長　2012 年 10 月まで三田メディアセンター事務長）

慶應義塾図書館の歴史は，明治初期の「月波楼」という図書室から始まったが，近代的大学図書館としての歩みは，明治 45（1912）年の赤煉瓦の慶應義塾図書館の完成において開始されたといって異論はなかろう。

慶應義塾図書館旧館は，正式には創立五十年記念慶應義塾図書館という名のごとく慶應義塾創立 50 年事業の一環として建設された。明治 40 年 4 月 21 日に創立 50 年記念式が東京市長尾崎行雄，米国大使ライト，文部大臣牧野伸顕らを迎えて三田山上にて賑々しく催され，式後には園遊会が開催された。来賓は三千名を超す大盛会であった。この式典の前年の 12 月，かねてから必要に迫られていた図書館を建設しようと「慶應義塾創立 50 年記念図書館建設趣意書」が発表され，広く図書館建設資金の募集が開始された。少々長くなるが趣意書の言葉の一部を引用してみたい。曰く「図書館は大学教育上に欠くべからざる設備にして，欧米諸国の大学を見るにいずれも広大なる図書館の設あらざるなし。けだし大学専門の教育に，教場の講義とともに図書館の研究に重きをおくは欧米一般の趨勢にして，その国々の大学が図書館をもって設備の一大要件となす所以なれども，わが国の如き公私図書館の数少なくして一般閲覧者を充たすあたわざる国においては，大学図書館を単に学生の研究場たらしむるに止めず，これを公開して世間の公益に資するの必要あるを信ず」。『慶應義塾七十五年史』によると，（趣意書を）「発表するや，義塾内外より続々申込あり，間もなく予定額を超えて寄付総額 36 万円に達した」とある。

こうして図書館は，明治 42 年 6 月に起工し，2 年 10 カ月の工期を経て，明治 45 年 4 月に竣工，15 日には引き渡しが行われ，翌 16 日から学生の閲覧が始まった。5 月に入ると新聞に公告を出し，寄付者や家族の観覧を奨励したこともあり，見学者が絶えなかったという。

開館から一カ月を経た 5 月 18 日，開館式が挙行された。開館式は新築された図書館の大閲覧室で催され，式終了後は楽隊の演奏や多数の模擬店など，三田の山はお祝いムードにあふれた。

以来，図書館は慶應義塾の教育・研究に欠かせない施設として，また慶應義塾のシンボルとして在校生，卒業生の心に刻まれてきた。

大閲覧室における開館式

明治 45 年 5 月，開館式当日の三田正門

開館 100 年記念事業の企画全貌

2012 年の今年，開館 100 年の記念すべき年を迎えるにあたり，いくつかの記念事業を企画した。当初は，なによりも懸案であった『慶應義塾図書館史』(伊東弥之助著，1972 年刊）の続編の執筆・編集をなんとか実現したいと考えた。詳細は後掲の長野の記事に譲るが，6 キャンパス全体ではなく，三田の図書館の歴史を中核とした続篇『慶應義塾図書館史稿』を編纂することとし，三田キャンパスの調整予算委員会に申請して 200 万円強の予算を獲得したのは，2011 年 4 月であった。そこから編纂委員会を内部で設け，刊行準備にとりかかったことになる。

また，ちょうど 2011 年 10 月に完成した図書館展示室でなんらかの記念展示を行おう，あとは 30 年前に完成した新図書館を元来のデザインを意識して見場よくしようと考え，入口大階段付近の模様替えを図ることとした。さらに，できれば慶應義塾の機関誌「三田評論」に開館 100 年に関連した記事の掲載をしたい，というのが計画の全貌であった。

しかし，図書館史続編の編集で，資料をさらい，図書館 OB や名誉教授にお話をうかがっているうち，こうした方々に一堂に集まっていただける機会をつくりたい，節目を節目としてきちんと祝うために記念式典を開催したいと考えるようになった。田村俊作館長，図書館担当の長谷山彰常任理事の賛同もいただき，11 月には，2012 年度予算として，146 万円の記念式典および記念展示経費を計上した。近年，慶應義塾で経費節減がいわれていることに配慮し，できるだけ予算をしぼった結果である。式典出席者には『慶應義塾図書館史稿』を記念品として配布することも決まったが，過去の新館開館記念式典の折にはペン立て，皮しおり等必ずなんらかの記念品が配られていたことを考え，2011 年度終盤になって調整予算の予備費を申請して，記念品として図書館大時計に刻まれた文字 Tempus Fugit を刻んだペーパーウエイトの作成を図った。

こうして，当初の企画からかなり手を広げた記念事業ができあがり，『慶應義塾図書館史稿 1970–1912』の刊行，記念式典開催，記念展示開催が確定した。4 月の定例のグーテンベルク聖書のファクシミリ版の展示の折に，稀覯書中の稀覯書である『グーテンベルク 42 行聖書』を公開してはどうだろう，という提案がでてきたのは，2011 年 12 月も末のことだった。年明けにグーテンベルク聖書委員会を招集し，展示公開について了承を得，具体的に展示計画をつめたのは，後述の松本の記事に詳しい。

記念事業のメニューが多彩となるにつれ，「三田評論」を座談会や関連記事を併せた特集としてもらいたいと考えるようになり，編集部に提案し，6 月号「特集：大学図書館のこれから」に掲載が決まった。4 月 28 日に行われた記念式典やグーテンベルク聖書展示の写真も同時に掲載され，塾内外に節目の記録をお見せすることができたのは喜ばしいことである。

現在(9 月)は，記念展示が開催されている。本来，記念式典に併せた展示開催が一般的だが，ちょうど 8 月末に，私立大学図書館協会の総会・研究大会の三田キャンパスでの開催が決まっていたため，多くの他大学の図書館関係者にも見ていただこうと展示開始を 8 月 29 日とした。450 名を超す参加申込みがあり，展示企画の担当者たちも準備に力が入った。両日は熱心な見学者で賑わった。

100 年の節目の年に，この私大図協の大会を引き受けられたのも記念となった。今回は第 73 回大会であるが，前回慶應義塾が会場となったのは 1992 年の第 53 回で開校まもない湘南藤沢キャンパスでの開催であった。ちなみに第 1 回目も実は慶應義塾で開催されている。昭和 13 年 5 月に 17 大学から 23 名の参加を得てのことであった。

こうして記念展示は記念式典とは日を分かつこととなったが，式典当日は前述のとおり『グーテンベルク 42 行聖書』が展示されたため，式典に出席された方々にも十分堪能いただけたのではないかと考える。また，図書館施設整備を目的とした使途指定寄付を急きょ実施することとなり，善意が集まってきている。今後さらなる協力をお願いしていきたい。

開館 100 年記念展示は 10 月 13 日に終了する。図書館史稿の編纂から始まった開館 100 年記念の事業計画は一通り終了するが，それで終わりとせず記念事業関連の写真，記録等を，図書館アーカイブとして整備しようと考えている。「文献シリーズ」の復刊第 1 号としてまとめる予定である。図書館史編纂時から，大学の管財部や広報室の倉庫から貴重な図面や写真も探索した。それらをデジタル画像とするなどして，次の記念年に備えることまでを一連の業務として，開館 100 年記念事業は無事終了することとなる。